

新聞が伝えた北京五輪
—スポーツと政治を考える—
的地 修¹⁾

Study of sport and politic in the Olympic Games

Osamu MATOJI

Abstract

The history of the Olympic Games is often described as the history of conflict between the nations and races. During the era of the cold war, some countries cancelled or were forced not to attend the Games at Moscow in 1980 and at Los Angeles in 1984. This was because of the political power. The Olympic Games also were interfered with Ethnic conflicts. On the 8th of August in 2008, the sacred torch relay of the Beijing Olympic Games was interrupted by people who complain about Tibet problems. The mind of modern Olympic Games established by Pierre de Coubertin is contribution to world peace and friendly relationship among countries over the world by sports. Based on issues in 2008 Beijing Olympic Games, sports and politics were discussed in this paper.

Key words : Mr. Amateur, Youth Olympic, Boycott

1) 競技スポーツ学科

はじめに

国際オリンピック委員会（IOC）の歴代会長で最も厳格なリーダーといわれたのは、1952年から20年にわたってアマチュアリズムを貫き通した米国のブランデー会長である。オリンピックのプロ化を拒み続けたその頑固さは「ミスターアマチュア」と呼ばれ、五輪憲章の根本原則である「スポーツを通して青少年を教育することにより、平和でよりよい世界をつくることに貢献する」に徹した。

オリンピックをテコにナショナリズムの高揚、宗教や人種による差別を誰よりも嫌ったブランデーは「スポーツは政治とは無関係である」と雄弁を振るった。しかし、米ソの冷戦時代を経て20世紀後半の五輪は、商業主義の導入や冷戦終結の大きな時流に歩調をあわせるかのように多様な国際情勢をむしろ実用主義的にとらえて大きく姿を変えた。

2008年8月にアジアで3度目の夏季五輪になった北京五輪は、近年では例をみないほど政治との関わりがクローズアップされた。中国の躍進ぶりを世界にアピールした開会式には、欧米の首脳が顔を揃え、メディアが伝えたニュースからは「五輪サミット」を強く印象づけた。

聖火リレーを巡って起きたチベットの独立問題や開会式に合わせたように起きた南オセチアを巡るロシアとグルジアの紛争など複雑な国際情勢に押し流されることもなく、北京五輪は13億人民の国威発揚を際立たせて「大成功」の評価を得た。21世紀の五輪は、国際政治と協調して「肥大化」のまま歩み続けるのか、世界中が注目した北京五輪から「スポーツと政治」をあらためて考えてみた。

1. 五輪と国際政治

1949年10月、毛沢東が天安門広場で新中国成立を宣言してから半世紀余りの2008年3月、中国現代史の主舞台に平和の祭典を告げる聖火がアテネから運ばれ、天安門をスター

トに世界5大陸を巡った。順風満帆の船出になるはずの平和の灯火は、チベット問題に端を発したトラブルで欧州、米国でアジアでもさまざまな波紋を投げかけた。

聖火リレーは1936年のベルリン五輪でナチスのプロパガンダとして初めて登場したが、北京五輪の聖火リレーは、中国の人権政策に異を唱える人権擁護団体の抗議行動のターゲットになった。歴史が移り変わっても五輪は世界中の注目を集める地球規模のスポーツイベントであり、権力を持つ者も持たない者にも、支配する側もされる側にとっても五輪ほど利用価値の高い道具はない。中国政府は当初、聖火リレーのトラブルを巡る欧米の報道を国内では一切封じ込んだ。北京を訪れた日本の新聞社の特派員ですら世界各地で起きている聖火リレーのトラブルは、インターネットで調べようにもことごとくアクセスを拒否され、TV報道も英国のBBC、日本のNHKでさえ中国の意向に沿わない内容は、画面が真っ黒になり、音声も途絶えたという。人種や宗教の違いを超えて人類をつなぐはずの聖火が国家間の亀裂を生む。五輪は「平和」のシンボルであるのと同時に国と国の「対立」を必要以上に深めてしまういわば諸刃の刃でもある。

しかし、冷戦終結という大きな歴史の変革を経た21世紀国際社会は、戦前のベルリン五輪と違って「協調」という良識を持ち合わせている。スポーツ界を代表するIOCは、「反中国」の国際世論に屈することなく中国政府に解決の手立てを委ねた。「政治に干渉しない。政治からも介入は受けない」というロケ会長の優柔不断にもみえる姿勢は、中国首脳の態度を軟化させ、チベット亡命政府との対話を引き出した。

8月8日に北京に戻った聖火は、17日間、メインスタジアムの「鳥の巣」で赤々と燃え続けた。国際政治、経済の舞台でも急台頭した大国は、驚異的もいえるパワーをみせつけ金メダル51を獲得し初めて世界の頂点に立っ

表1. オリンピックと国際政治をめぐる出来事

大会名	政治的介入
1972年 ミュンヘン	パレスチナ・ゲリラが選手村を襲撃し、9人のイスラエル選手が死亡した。ゲリラ達は200人の同士の解放を要求した。
1976年 モントリオール	アパルトヘイトに対してアフリカ諸国がボイコット。ニュージーランドのラグビーチームが南アフリカに遠征したため、追放するように要求した。
1980年 モスクワ	旧ソビエト連邦のアフガニスタン侵攻に抗議して、アメリカと他の63ヶ国が大会をボイコットした。
1984年 ロサンゼルス	1980年のボイコットのお返しとして、旧ソビエト連邦と15の共産圏の国々が大会をボイコットした。
1988年 ソウル	北朝鮮で大会を開催する要求により、南北間の緊張が高まった。共産国のボイコットの継続の危機が続いた。
1992年 バルセロナ	IOCと旧ソビエト連邦国であったウクライナとグルジアの間の緊張。両国は独立国家を主張し、独立国家の共同体（CIS）の統一チームにならないと強固に主張した。エリツィン大統領とサマランチIOC会長の会談後に大統領による介入。
1996年 アトランタ	ギリシャが100周年記念大会の権利を否定された後（1896年に近代オリンピック大会が復活されてから100年）、アトランタが代わりに選ばれたため、ギリシャはボイコットをほのめかした。
2000年 シドニー	政府が長期間に渡って、先住民の政治的問題をまったく無視したことに対して、先住民のアボリジニの人々が一連の反対運動を展開した。このことによって、組織委員会が先住民アスリートであるキャシー・フリーマンを聖火の最終点火者に指名するきっかけになった。

た。1 党支配の結束力は、五輪会場を埋め尽くした赤いシャツと五星紅旗の大きな波に象徴され、強烈なナショナリズムは大きなうねりになった。そのよし悪しはともかく、世界中から集まったスーパースターが演じたドラマに世界中が歓喜し、4年に一度巡ってくる「平和の空間」を楽しんだ。

20世紀末に東西冷戦の枠組みが崩れて以来、五輪運動にもボーダレス、グローバル化の波がどっと押し寄せている。民族独立、分離が急テンポで進み、再編された世界の各地から北京に集まった選手は1万3千人、参加は史上最多の204ヶ国地域にのぼった。豪華絢爛の開会式に集まった国際政治の主役もブッシュ米大統領、ロシアのプーチン大統領、フランスのサルコジ首相のほか、日本、韓国、北朝鮮のアジアのリーダーも顔をそろえた。「例をみない五輪外交」が繰り広げられたが、躍進中国が五輪という検舞台でその存在を世界に誇示したことはいうまでもない。

血塗られた五輪で知られる1972年のミュンヘン大会は、パレスチナゲリラによる選手村襲撃でイスラエル選手ら9人が亡くなった。1976年のモントリオール五輪は南アフリカの人種隔離政策（アパルトヘイト）を巡ってアフリカ諸国のボイコット騒動に揺れ、1980年のモスクワ五輪は旧ソ連のアフガニスタン侵攻が引き金になって米国が西側諸国にボイコットを呼びかけ、1984年のロスアンゼルス五輪は逆に旧ソ連が東側諸国のボイコットで報復した。近代五輪の歴史をひもとくと、国際情勢がいつも五輪に暗い影を落としている。北京五輪の聖火リレーを巡って沸き起こった「反中国」の国際世論も例外ではなく、五輪はまさに国際政治を映し出す鏡である（表1）。

2. 「血」か「地」

民族と国家の関わりを考えると、その根底にあるのは人々が自分の帰属の基準をどこに

置くかである。北京五輪の聖火リレーを巡って揺れ動いたチベット問題は、中国への帰属を望まないチベット人の抵抗運動を国際世論が支持したため、大きな騒ぎになった。五輪を巡る民族問題を考えるとき、92年のバルセロナ五輪で起きた国家と民族の対立が興味深い。

スペインからの独立を望み、民族主義を声高に叫んでいたカタルーニャ州の州都バルセロナに五輪開催が決まったのは1985年である。かつてフランスから独立し、スペインに従属したカタルーニャ州は、幾度となく独立を掲げて反乱を起こし、20世紀に入ってから軍事蜂起したフランコ軍と対立した。フランコ独裁政権が誕生するとカタルーニャの人たちは、厳しい弾圧を受け、カタルーニャ語の使用禁止や思想、文化活動も長い間、抑圧された。カタルーニャの人たちの積年の思いが、五輪開催で一気に噴出した。五輪憲章では、オリンピックの開催は国ではなく都市にその権限が与えられる。バルセロナ五輪を機にカタルーニャ独立運動が一気に高揚し、スペイン五輪委とは別にカタルーニャ五輪委をIOCに加盟申請したり、開会式ではスペイン国旗と並んでカタルーニャ旗の掲揚や公式語としてカタルーニャ語の使用を認めさせたり民族主義をこのときとばかりに打ち出した。

当時、IOCの会長はカタルーニャ出身のサマランチ氏だったこともあり、要求は次から次へとエスカレートした。バルセロナ五輪開催をはさんだ1990年代初めの欧州は、社会主義が崩壊し旧ソ連をはじめ、ユーゴスラビアなど民族国家が相次いで誕生。五輪にはロシアを除いて旧ソ連から独立した国は独立国家共同体(CIS)で参加し、分離、独立した旧ユーゴの国々は国旗の変わりに五輪旗を掲げて行進した。国際政治のうねりにカタルーニャの独立運動は便乗する格好になったが、大会が始まると異変が起きた。

あれほどスペインへの帰属を嫌っていたカタルーニャの人たちは、同じスペインの選手

が活躍し、金メダルを次々獲得するとカタルーニャの旗をスペイン国旗に持ち替えて応援に血眼になった。金メダルを獲得したサッカーでは、カタルーニャのシンボルといわれたカンブノウのスタジアムにスペイン国王が足を運び、バルセロナ市民とともに優勝を祝う大騒ぎになった。かたくなまでの民族主義を忘れたかのようにスペイン国家を受け入れた人たちは、金メダルを媒体に地方主義から国家主義へと簡単に鞍替えしてしまったのである。民族と国家への関わりは、複雑なようでも実際は、どの共同体に自分を組み入れるかであり、カタルーニャの人たちは、スペイン五輪史でも例を見なかった13個の金メダルを獲得したスペインの同胞として「強い国家」に自分を置き変えたのである。

国家を思考の共同体とするなら民族は血でつながった家族である。帰属する国家は「地」であり、民族は「血」である。崩壊した旧ソ連は幾多の民族が社会主義という枠の中で共同生活を営んでいた。「血」が違うからといって、民族紛争も起きなかった。第2次大戦のあと、チトーがバルカン半島に理想郷を描き、ユーゴを建設した。しかし、経済破綻や腐敗した政治、貧富の差、西欧化が国家分裂を招き、民族対立を引き起こす要因になった。北京五輪には、旧ユーゴからクロアチア、スロベニア、セルビア、ボスニア・ヘルツェゴビナが顔をそろえた。かつての同胞は、1992年のバルセロナ五輪のとき、紛争の最中でありクロアチア、スロベニアを除く分離国は、国旗を使わず五輪旗を使用し、メダルを獲得しても国歌を聞くこともなかった。かつては同胞の選手同士が紛争の被害者と加害者に分かれ、選手村ではトラブルを避けるため、宿舎を引き離されて目に見えない「民族」と「国家」の壁ができていた。北京五輪には、そうした壁はなかった。

華やかに幕を開けた8月8日、旧ロシアの南オセチアを巡って紛争が勃発した。選手村にも緊張が走る出来事だったが、当事国のロ

シアとグルジアの選手にいがみあいはなかった。射撃の女子エアピストルで対決した両国の選手は、グルジアの選手が銀、ロシアが銅メダルを獲得。競技後、笑顔でインタビューを受ける二人の光景は、政治という垣根を越えた民族の融和があった。

「スポーツで結ばれた選手同士の友情まで壊せない。戦争を引き起こすのも止めるのも政治家。ちゃんと話し合っほしいし」と二人は同じ思いを打ち明けた。「国家だ」「民族だ」と騒ぎ、不穏な動きを引き起こす元凶は、格差を生み出す貧困な経済や絶対服従を強いるような政治構造である。表彰式で仲良く抱き合っ互いの健闘をたたえたロシアとグルジアの選手は「私たちは政治とスポーツを混同したことはない」と強調した。記者会見で一人の記者から「政治家はあなた達に学ぶべきだ」の声がかかると二人は「それができていれば、最初から戦争は起きない」と答えた。陸上男子のスプリンター、ボルトが出した驚異的な世界新や競泳で8冠を達成したフェルプスの金メダル以上に二人の言葉は、大きな価値と重みがあった。

3. 五輪の将来像

華やかな北京五輪の宴がフィナーレを迎えた8月25日、IOCのロゲ会長は世界各国の報道陣を前に北京五輪を総括した。「最高の組織が運営した完全なオリンピックだった」と賞賛する一方で、IOC内部から出ていた「北京五輪のような派手なオリンピックはもうやめるべきだ」という声を否定しなかった。

IOCは五輪会場のコンパクト化を提唱し仮設や既存施設の利用を勧め、肥大化の見直し策として2012年のロンドン五輪では野球とソフトボールを除外してスリム化に乗り出すことを決めている。国際世論の反発を招いた聖火リレーの国際ルート廃止など見直しも踏む。国家の威信を誇示したり、民族の優位性を際立たせたりするような華やかな五輪こそが、国際間や民族間の溝を深める要因にもな

るからだ。外交官のキャリアを發揮した前任のサマランチ会長と違って弁護士出身のロゲ会長は、五輪憲章というルールを遵守する保守的なリーダーである。「サマランチ時代の五輪は北京で終わった」という声がIOC内部でも出ているが、北京五輪の閉幕は、同時に新しいロゲ時代の幕開けを印象づけた。

サマランチ会長が国家首脳に自ら飛び込んで、1988年ソウル五輪では分断国家の共同開催に奔走した。1992年のバルセロナ五輪では国際社会に先駆けてアパルトヘイト（人種隔離）政策の南アフリカを五輪復帰させるなど手腕を發揮。2001年に開催が決まった北京五輪も、いわば「サマランチ会長の置き土産」だった。北京開催が決定した2001年のIOC総会で、北京を強く支持していたサマランチ会長が退任した縁もあるが、中国が五輪復帰した1984年以来、サマランチ会長は建国の記念式典など機会あるごとに北京に足を運び、中国指導部関係者に五輪開催を勧めるなど自ら「五輪外交」を展開した。後任のロゲ会長は、自らが政治家と親密になり外交関係を築くようなことには興味がないといわれる。派手な政治活動よりもむしろ五輪の理想を追求する実務派である。

近代五輪を創設したクーベルタンの精神に真髓しているロゲ会長は、さまざまな問題を抱える五輪を見直し、軌道修正に乗り出している。ユース五輪の創設がその一例だ。2007年のグアテマラのIOC総会でロゲ会長自らが「青少年のスポーツ離れを食い止める大会」を提唱し、通常五輪の中間年にあたる夏季五輪ユース大会は2010年から冬季大会は12年からの実施が決まった。ユース五輪は14歳から18歳までの青少年に参加資格を与えるが、莫大な経費を費やす五輪と違ってコンパクトな大会を目指している。選手は夏季が3200人（北京五輪は約11000人）、冬季が1000人（トリノ3000人）で大会規模を縮小する。競技施設も新設を認めずに既存の施設の利用を呼びかけている。先進国や経済大国に限られる五

輪開催とは一線を画すことで、南米やアフリカの五輪未開催の新興国にもスポーツ祭典を開くチャンスを広げることができる。

さらにロゲ会長の構想には、国旗や国歌の使用も認めず、政治や宗教、民族問題にも影響を受けない純粹のスポーツ祭典実現の構想が膨らんでいる。「クーベルタンのオリンピック精神には、青少年の育成が謳われている。現代社会を生きる青少年は、自分の部屋に閉じこもり、スポーツ離れが深刻である」とロゲ会長はIOC総会で強調した。ユース五輪は次代を担う子どもたちに「スポーツを通じて健全な肉体、精神を培うことにある」を訴える。格差をなくし、少数民族の融和をはかり、自立心を養う。現代社会が抱えるさまざまな問題をスポーツという共通の言葉で理解しあうことも強調している。IOCが約30億円の拠出金を出し、第1回大会の開催がシンガポールに決まった。大国ではなくアジアの新興国で開催される意義は大きい。スポーツだけでなく文化の国際交流プログラムも計画されている。

現代の五輪を蝕んでいるドーピング（禁止薬物の使用）もユース世代から教育すれば、廃絶も不可能ではない。ロゲ会長がユース五輪にかけるもうひとつの狙いである。「ドーピングは大会中の講習会を通じて青少年に理解させる」という。国家を巻き込んだし烈なメダル争いやトップアスリートの名誉や金銭欲がドーピングの一因である。ユース五輪では、過度な勝ち負けの争いが国家間の紛争に転化されないように表彰式の国歌演奏の廃止などを導入するのもそのためである。しかし、世界最大のスポーツビジネスともいわれる従来の五輪とその対極になりそうなユース五輪。ロゲ会長がこの二つのオリンピックでどんな舵取りをみせるのか、2010年のシンガポールユース五輪とその2年後のロンドン五輪にスポーツ界だけでなく世界中が五輪の未来像を描く。

北京五輪の閉幕のあと、ロンドン五輪組織

委のコー会長は「未来を担う子どもたちにスポーツの素晴らしさを伝えるようなオリンピックにしたい。それを次世代への遺産にしたい」と世界に呼びかけた。ロゲ会長も「ロンドン大会は近代スポーツを発明し、ルールやフェアプレーの精神を生んだ英国に戻る。オリンピック本来の価値も構築すべき大会であってほしい」と華美な施設や派手な運営よりもスポーツが内包する精神面の豊かさに目を向けた五輪を奨励している。

結び

五輪はどんな方向に進むのか。東京都が2016年の五輪開催に立候補していることもあって、北京五輪に注目していた。開幕前、IOCのマーケティング責任者を務め、サマランチ前会長の右腕ともいわれたマイケル・ペイン氏の著書「オリンピックはなぜ、世界最大のイベントに成長したのか」を読み、TVの画面が伝える豪華絢爛な北京五輪に目を凝らしていた。TV、新聞、雑誌が伝えた北京五輪には、チベット問題や物議を呼んだ開会式の「演出」など「罪」を帳消しにするような陸上や水泳のスーパースターの競演があった。感動的なメダル争い以外にも、競泳オープンウォーターでは、義足の選手がトップアスリートに混じって力泳する姿に心を打たれた。マイケル・ペイン氏の著書に「オリンピックには4つのブランドがある」という一節が出てくる。1) 希望：オリンピックはより良い世界を実現するための希望を与える。誰もが参加できるスポーツ競技を用いて、モデル・教訓になるよう差別を一切切除する。2) 夢と想像：オリンピックは、懸命の努力と自己犠牲と強い決意とで、自分の夢を必ず達成しようとする選手の心を刺激する。オリンピックには、人に「やり遂げよう」と思わせる力がある。3) 友情とフェアプレー精神：オリンピックは、スポーツに本来備わっている価値観を通して、人間が政治的、経済的、宗教的、人種の偏見を克服していく様子を具体

的に示す。4) 努力する喜び：オリンピックは、その結果にかかわらず、最善を尽くすことで普遍的な喜びを大切にす。オリンピック選手は競技で誇りと尊厳を示し、我々に数々の教訓与える。

この4つのブランドを理解することで、4年に一度、地球上に出現する「五輪という空間」の素晴らしさにあらためて気づく。2016年に五輪招致を目指す東京は、その理念に「人々に夢と希望を与え、都市を躍動させる」を掲げている。充実したインフラや2度目の五輪開催という運営能力に頼るのでなく、石原都知事やスポーツ関係者は国民のだから賛同を得られるように理念を浸透させなくては、招致レースのシカゴやサンパウロ、マドリードのライバルには勝てないだろう。

参考文献

- 朝日新聞社 (2008) 北京五輪のページ, 2008年8月8日, 8月25日 (朝刊).
- 毎日新聞社 (2008) 北京五輪のページ, 2008年8月25日 (朝刊).
- 日本オリンピックアカデミー (2004) 21世紀オリンピック豆事典.
- Payne, M. (2008) オリンピックはなぜ世界最大のイベントに成長したか. 保科京子・本間恵子訳, pp.182-183, グランドライン.
- 鈴木良徳 (1985) オリンピック暮色. ベースボールマガジン社
- 武田 薫 (2008) オリンピック全大会. 朝日新聞社.
- 読売新聞社 (2008) 北京五輪のページ, 2008年8月25日 (朝刊).

